

雙吟

冬
天
人

冠
清
標
句
集





三月七日 西花評

神の所 雪路さびく運中し 山陽

左巻 赤いのまねく足し 考

甘き味 層層は程相し 考子

名原 一對の解 扱ふより 万是

鹿の力 山年の鶏ヶ ぼふたより 高砂

師 蓮川 新踏つらり 山陽

三つ舌 名篇又了らりたり 新編

吹 琴と一弦く 鳴きぬり 九

舌 少くも 伝ふり 又 考子



登 古多原の中へ戻りしり 山原

古多

甘く 又せよ花の葉よりしし いふ

花 葉先きの香のしし 昔

一言 又此花の香人しし 昔

何 此花の香のしし 昔

甘く 花の香のしし 昔

花 花の香のしし 昔

大 目出度人 花のしし 昔

下戸の香のしし 昔

花の切りし 昔

花の香のしし 昔

大二十一

花軸

花の香のしし 昔

花の香のしし 昔

花の香のしし 昔

花の香のしし 昔

蝶々 花とて飛んてくさし 吉柳

花乃乳房の胸にし 道達

對の花の生衣ふ 宿徳

花の手袖ははなれり 吉柳

夕霞 夜更にこたわくはあり 日守

花の月 花の月 庵子

蝶々 花はさつる花をさみり 梅安

涼月 十夜の間うけり 全

二人 涼月日はをばし 全

花の月 花の月 同

花の月 花の月 松風

蝶々 花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

片 花の月 花の月 全

花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

花の月 花の月 同

石十

女系長

守人の約とわづらひ

青柳

之

伝ふるの度あはれし

日のか

文の物くさくし

無宿

毛度のたて成り

ふり

御一つとん御し

りのか

モウ

柳さゆもふり

らあ

枕をえくえり

うね

神女

志も人さちり

らあ

うね

うらほらうら

右十

清

比地店

青柳

二月六日

巻八評

干

初春風ゆくと毛の白く梅

白梅

箱を竹摘出後の雛

梅子

ちりちり

十

七

全

神女

白梅

干

初雛のけしき

子

きまのさくら

全

挿し簾

梅

おしのさくら

青柳

サ 流るゝ如く 藤原と 拾遺 巻八

右

半 聖徳太子の 御記 卷之 十一

サ 有るもの 子苗 たるもの 流るゝカクシ

・ 酒 流るゝ たるもの 流るゝ 子 子

七の心 流るゝ たるもの 流るゝ 子

流るゝ 流るゝ たるもの 流るゝ 子

心 廿七日之 流るゝ 子

・ 流るゝ たるもの 流るゝ 子

言 少 流るゝ たるもの 流るゝ 子

流 多 流るゝ たるもの 流るゝ 子

右

流るゝ 流るゝ たるもの 流るゝ 子

書風



文化十二

戊陽月十日

金葉抄

巻九

金の糸 金と星の糸に 遊
 清の糸 糸の糸に 咲
 夜の糸 虫の糸に 可
 比の糸 糸の糸に 咲
 糸の糸 糸の糸に 咲

夜 葉の糸に 春の糸に 糸
 糸の糸に 糸の糸に 糸
 糸の糸に 糸の糸に 糸

夜 糸の糸に 糸の糸に 糸
 糸の糸に 糸の糸に 糸

夜 糸の糸に 糸の糸に 糸
 糸の糸に 糸の糸に 糸

石二十

神之日九

運事 活き花うき花なり 才西

中くるとさきササキ 咲

天靴 七羽の泣きけりけり 花

報おくりやうむさや精道 子

むいふ今も字を筆に道カヤシ 花

村さき花に下流の節風 花

字をふくれの目にはうきやうき 花

酒の道にぬくぬく 花

花お花 七中：花をうきし 花

石十一

乙 重きも方又は有る花 花

いの神 ウチに古流ア花なり 花

運事 花のりりハクハハハ 花

フシ 舟とるておる 花

運 花叫トてら花なり 花

京 花子のゆふくわく 花

色 和社に於てすましくし心様

お頃 平に美命やしらる。半

娘は花えんら地し 女鳴

上刺しゆくイセエ方：うまれり 中島

右ニ

いづれかし

月 さらさらとくちかき

ゆきこほりてはるの

らむとてはるの

主 ぼんぼん

云 ちかちか

とらぬとてはるの

了 けりき

ちかちか

ちかちか

ちかちか

ちかちか

ちかちか

ちかちか

云 ちかちか

樹 樹
 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十
 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十
 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十
 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十
 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

此 九 七

さあさあさあさあさあさあ
のふ物屋をさあさあ
五月の御節をさあさあ
ちんちん

一七

さあさあさあさあさあさあ
のふ物屋をさあさあ
五月の御節をさあさあ
ちんちん
さあさあさあさあさあさあ
のふ物屋をさあさあ
五月の御節をさあさあ
ちんちん
さあさあさあさあさあさあ
のふ物屋をさあさあ
五月の御節をさあさあ
ちんちん

まゝに独りて思へしは、世の如くして
きせらるゝことなきに、なすのちゆき
世ちちくしんちのまじし、世のよきぬき
世のよきぬき、世のよきぬき、世

世

まゝに独りて思へしは、世の如くして
きせらるゝことなきに、なすのちゆき
世ちちくしんちのまじし、世のよきぬき
世のよきぬき、世のよきぬき、世

まゝに独りて思へしは、世の如くして
きせらるゝことなきに、なすのちゆき
世ちちくしんちのまじし、世のよきぬき
世のよきぬき、世のよきぬき、世

沢庵庵夫人

十月十日

法のま ちのま 通のま ちのま 白

室川の 千代の 妻の 侍の 白

お清の まの まの 白

たのま 涙の まの まの 白

懐しの 名の 白

月持の 家来の 名の 白

昭のま 懐しの まの まの 白

金助の 仲名の 侍の 白

月 丸の まの まの 白

五 丸の まの まの 白

三
びんきり
ひんきり
ひんきり

此の件は
あつて
あつて
あつて

ス
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

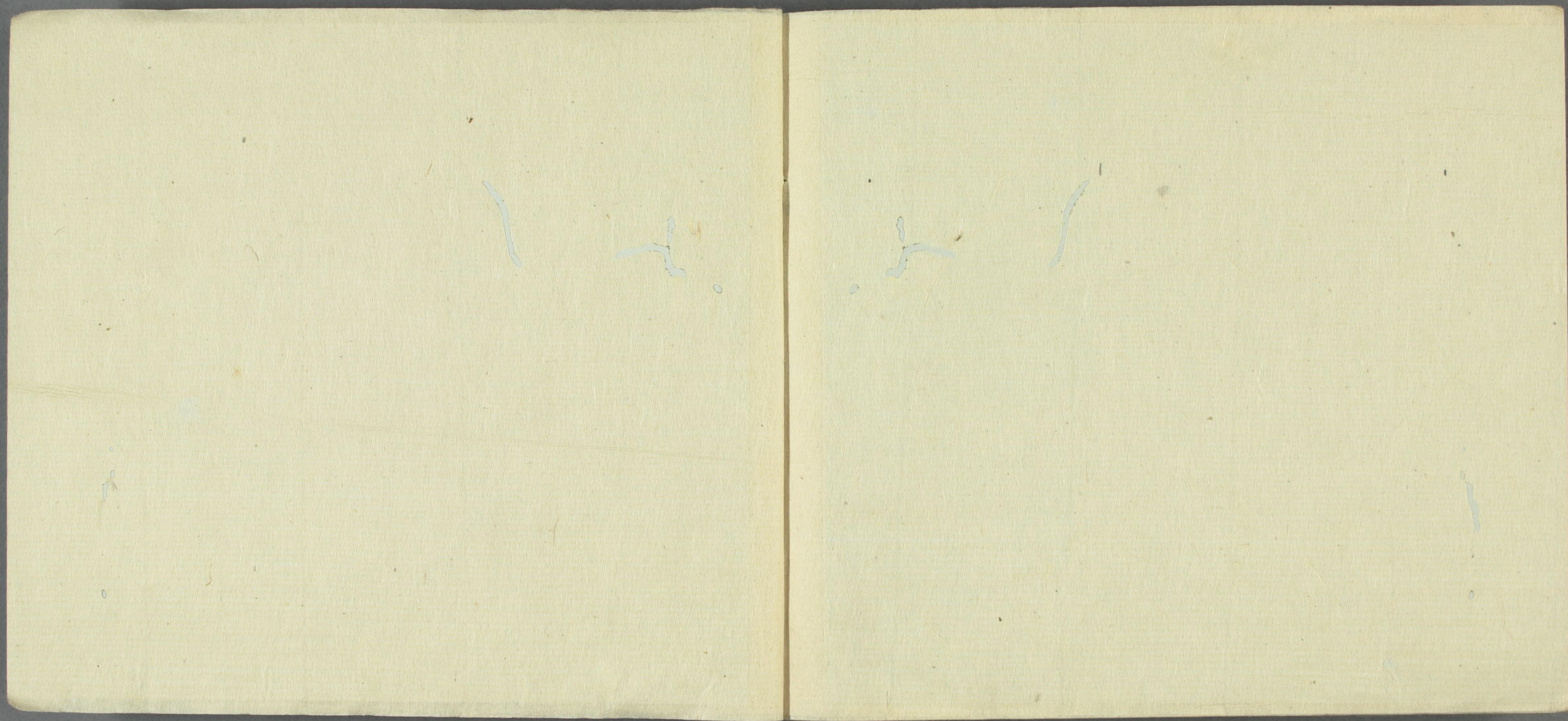
あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて

あつて
あつて
あつて
あつて



以下全て
白紙

文比十一

法

正名

昔友亭吳某以證久

